

小金井雑学大学

だより

第5号

平成11年2月20日発行

一周年記念講演

地球環境問題をテーマに

四月四日一周年記念講演

小金井雑学大学は、昨年三月の開校式からまもなく一周年を迎えようとしています。現在登録会員およそ百名、その他に一度は受講された方は約三百名を越えました。一月までの述べ受講者は約千四百名になります。

熱心に聴講する学生の皆さんの向学心には、心から敬意を表するものです。

広範な講義内容

これまで教授をしていただいた方々は、二十人。他に現在八人の教授が決まっています。講義の内容も広範な分野に及び、文学・歴史・健康問題・福祉・芸術・自然・教育・生活などなど、長い間その道の専門家としてたずさわってきたことを講義されました。雑学とは言いがたい専門的な深い知識は、学生や受講生の皆さんに大変好評でした。

一周年になるこの春に、記念講演をすることが決まりました。教授となるのは、平成二年に環境庁

が設立されたのにもない、初代地球環境部長をなさった加藤三郎氏です。講演のテーマも地球環境問題で、地球温暖化を初めとしますます深刻さを増すこのテーマに第一線の研究者の立場から現状とその処方箋について講演していただきます。

加藤氏は、それ以前厚生省で公害問題を担当し、ごみ行政にもたずさわるなど環境問題では長い間広範な分野でご活躍された方で、行政に携わり実態を見、対策を立て実行した貴重な経験をお持ちです。知識だけでない見識が期待できます。

当大学では、これまで小金井市を中心とした近隣の方を教授にお迎えすることが多かったわけですが、今回は小金井に縁のある方の

ご紹介で、川崎市の加藤氏に決まりました。ご好意に深く感謝したいと思います。

小金井雑学大学は、学ぶ場であると同時に、相互の交流や親睦をする場の提供もしております。交流の場を作りたいと思っておりますので、大勢の皆様のご参加をお待ちしております。

★ ★ ★

加藤三郎氏のプロフィール

一九三九年東京生まれ。

六六年東京大学大学院を終了し厚生省入省。その後環境庁の設立で、公害・環境行政を担当。九〇年に地球環境部の初代部長に就任。九三年退官。

その後環境文明研究所を設立すると共に「二一世紀の環境と文明を考える会」を主宰。

他に、海外環境協力センター専務理事、環境社会推進国民会議事務局長、日本環境経営社協会顧問など兼務。

主な著書…『地球市民の心と知恵』『環境と文明の明日』『循環社会創造の条件』他多数。

第十七回講義 十二月六日
『海外旅行でスケッチする』

教授 永沢まこと氏

一般的に絵は、例えば外で描いたものを家で仕上げたりしますが、スケッチは全てその場で仕上げるのが原則です。子供の頃は誰でもスケッチをします。本格的に勉強をしようと石膏デッサンを始め、そこで絵が嫌いになる人が多

いのです。正確に描くのは、技術はうまくなるが面白さがなくなってしまうからでしょう。私の場合、絵の描き方は学校で学んだものではなく、全部一人でモノをよく見て「線」で描くという方法で身につけました。

絵を描く道具としてはスケッチもペンを使い、後から絵の具を塗ってもしままないペンを選びます。正しく描かなければいけないとか、構図をどうするとかにこだわらず、見た通りでいいいに輪郭を取っていく。これは誰でもできることだと考えています。重要なのはとにかくモノをよく見ること。もし展覧会で気に入った絵があったら、五分でもじっと見るこ

とをしてほしい。絵を描くと普段モノをしつかりと見ていないことに気がつくはずですが、ペンで描く理由は、直しが利かないからです。失敗をおそれぬ度胸を身につけていくことが大事なポイントです。鉛筆のように修正がきく道具では「失敗しても直せるから」と思って集中力を欠きます。

年間数百万人が出かけるほど、海外旅行が盛んです。年配の方のツアーが多いと聞くと、慣れる暇なく時間が過ぎてしまいます。むしろツアーを使わず、絵を描こうと思う方は、長期で外国で家を借りて滞在するのも良い方法です。

昔から絵を描こうとする人の多くはよく旅をしました。それによって見知らぬ国の風物を、スケッチなどを通してじっくりとみることが出来たわけです。例えばヨーロッパへ旅行をするとしても、名所をサッと見たり写真を撮るだけではなく、一か所に腰をおろし、スケッチを通してしっかりとヨーロッパを自分の目で見たら如何でしょうか。

第十八回講義 十二月二十日
『河川の生物と自然保護』

教授 西脇三郎氏

自然保護を考える時、生物の生活史をよく知ることが大切である。例えば自然保護の例によく出

てくるホタルの場合、餌となるカワニナは意外と知られていない。カワニナが子供を産む時期や出産数もわかっていないし、日本には琵琶湖を中心に十五種類のカワニナ類があり、種類の見分けも難しい。最近の研究で、カワニナ類は春から秋にかけて夜子供を産むことがわかった。自然保護の目的でホタルを育てるために、人間がカワニナを遠隔地から宅急便で取り寄せることがあるが、生息場所が変わると繁殖できない可能性もあり、人間がカワニナの自然の繁殖を妨害することにもなる。

河川に住む生物の中には、川と海を行ったり来たりして一生を送る通し回遊という生活史を持つ生物がいる。例えばサケ、アユ、ウナギなどである。サケでは人間が人工的に増殖するために、サケが

増え過ぎて沿岸の小魚を食べつくしてしまい、生態系のバランスを崩してしまうことが指摘されている。

私が研究しているイシマキガイは伊豆半島以南に多くいるが、生活史がよくわかっていない。残念なのは、アユと餌になる藻類で競争になり、イシマキガイがアユの餌を食べてしまうという理由で、人間がイシマキガイを取って捨てるという現象が起きていることである。実際は、アユが昼間活動し餌を摂るのに対し、イシマキガイは夜活動し摂餌するので、共存が可能と思うが、生態をよく調べないで捕獲し捨てているのである。

生物の保護を考える時は、その生物の生活史をよく調べて、生物の立場に立った見方をすることが大切である。そうすることによって多くの生物の共存共栄が可能になる。人間の利益のために、人類が地球上に出現する以前から生存している他の生物を破壊させることはあってはならないことである。

第十九回講義 一月十七日
『世紀末ウイーン文化と
ユダヤ人』

教授 村山雅人氏

世紀末文化といえ、今ではウイーンの文化を指すのが通り相場になっている。十九世紀末のウイーンを舞台に、芸術や学問のあらゆる分野で、斬新かつ世界の最先端を行く業績が次々に生み出されていった。まさにウイーンは、新しい考えや構想が無尽蔵に湧き出る泉であった。こうした文化の担い手になったのは、ウイーンの市民階級の子弟である。

世紀末にウイーンで文化が開花したのは、いくつかの理由が考えられる。一八六六年にプロイセンとの戦争に敗れて、オーストリアにはじめて自由主義が政治に登場し、市民階級が政治的に力を持つようになったこと。この敗戦により、多民族国家オーストリア各地で民族主義が激化し、有能なドイツ系オーストリア人が、まだ超民族的雰囲気が強かったウイーンに移住してきたこと。この二つは特に重要である。移住者の中には

ドイツ語教育を受けてすでにドイツ文化に同化していたユダヤ人が多く含まれていた。

これら同化ユダヤ人の子や孫たちの世代が、美術と建築を除くすべての分野で文化創造の中心となった。その中でわれわれに最もなじみの深い人物は、ウインナー・ワルツを世界の音楽にしたヨーハン・シュトラウス(息子)と精神医学において新しく「精神分析」を確立したジークムント・フロイトであろう。同化ユダヤ人の活躍は、経済界においても著しかった。こうしたユダヤ人の台頭が、二〇世紀初頭のウイーンで強力な反ユダヤ政治運動を生み出す原因となった。ナチ時代に迫害を受けたユダヤ人の中であって、シュトラウス・ファミリーは別格である。ナチ政府は彼らの出自を改竄してまで、彼らの音楽をドイツ的な音楽として奨励した。驚くべき「ニューイヤ・コンサート」は、ナチがオーストリアを支配した翌年の一九三九年に始まっている。

臨時講義 一月二十四日
『杜甫の魅力』

教授 田部井文雄氏

中国最高の詩人杜甫(七一二～七七〇)は、その生涯を通じて、わが身とこの世とを嘆き続けた憂愁の詩人である。従って杜甫の詩の魅力は、何をどのように憂えたのかの解明によってこそ果たされるはずである。

杜甫の詩といえ、**「春望」**という詩の冒頭「国破れて山河在り」の一句がまず浮かんでくる。江戸元禄期の俳人芭蕉も『奥の細道』に引用し、敗戦後の日本人の多くをも共感せしめた名句である。しかしこの八句詩の結びは、自己一身の「白頭」という老残の嘆きにも及んで終わっている。

この詩に見るように、杜甫の憂愁は、わが身の不遇と、当面する乱世への痛嘆とが何らかの形で二つながら詠じこめられている場合が多い。その意味でも「春望」の詩は、杜甫の詩を代表する内容を持つが、だからといって、日本人にとつて有名なこの詩をもって、ただちに杜甫の代表作とはいえない。

い。それ以上に、たとえば、ここに示す「月夜」「羌村三首」「江村」「京より奉先県に赴く詠懐五百字」などなどといった名実ともに備わった名作群があるからである。

そのことについて、ここで詳述する紙数はないが、これらはすべて、正確精緻な言語による、徹底したりアリズムの表現に満ち、誠実きわまるヒューマニズムの精神によって貫かれた「憂愁」の内容を持つ作品ばかりである。そこに美しくもまた哀切に詠じ出された「憂い」の質を問うことこそ、杜甫にとつては人間存在の価値を問う基準であり、詩の読者にとつては、その魅力の源泉ではなかったか。

ともあれ、この詩人が今に残す千五百首ほどの作品は、多様多様な表現と内容とを持ちつつも、終始一貫して変わらないのが、この「身世の憂い」であり、人間への誠実と自然美への傾倒とであった。ここにはいささか、それをうかがうべく、今春三月有志の方々を訪れる予定の成都時代の名作の幾首かを紹介して、他日補説の折を期したいと思う。

今後のカリキュラム

- 2月21日「苗字からルーツ・先祖を探る」 野中富雄氏（日本家系図学会理事）
- 3月 7日「（仮）金融ビッグバンについて」
- 3月21日「マイクとともに半世紀」 野瀬四郎氏（元NHKアナウンサー）
- 4月 4日＊1周年記念講演「地球環境問題」 加藤三郎氏（元環境庁初代地球環境部長）
- ＊会場が変わりますので、ご注意ください。
- 4月18日「クスリの光と影」 稲榊修司氏（宮崎大学講師）
- 5月 2日＊山野草を採取して食べる＊
- ＊野外を歩きます。
- 5月16日「積極的な生き方ー人生80年生き生きとー」片平進一氏（中野いきいき会会長）
- 6月 6日 「転んでもタダでは起きない海外旅行術」 竹田洋香氏（エッセイスト）

- ・教室は小金井工業高校会議室。時間は午後2時～4時です。
- ・スリッパをご持参下さい。
- ・参加費は無料。出席はいつでも自由です。ご都合に合わせてご参加下さい。
- ・前の講義の資料がほしい方は、残っている場合がありますから、申し出て下さい。

1月24日に初めての受講生同志の交流会を開きました。

参加者23名で、短い時間でしたが、運営に関する意見などが交わされ、楽しい一時が持てました。これからも折にふれて交流を図っていきたいと思いますので、多数ご参加下さい。

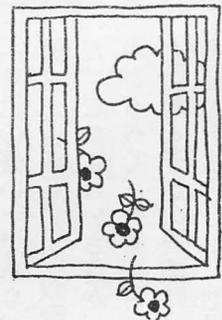
編集後記

梅の花が咲き始めました。
「こちふかば においおこせよ
梅の花」

この頃になると、この句を思い出します。

四月四日で雑学大学も一周年を迎えます。記念行事にむけて、私どもも準備を始めております。皆様もふるってご参加下さいませ。

（田頭謚子記）



発行責任者 五十嵐京子
小金井市本町

☎ & FAX

（夜間）